

対照言語行動学研究会（JACSLA）第20回記念大会 研究発表 概要

2022.10.8開催 於 神奈川大学 みなとみらいキャンパス

タイトル	「まともに」の意味と用法、及びその副詞的表現における位置付け
著者名（所属）	尚 暁歆（筑波大学 人文社会科学研究群 人文学学位プログラム（言語学））
連絡先Eメール	s2130006[@]s.tsukuba.ac.jp
<p>論文内容</p> <p>本研究では「まともに」の意味と構文特徴、及びその位置付けについて考察した。</p> <p>『日本国語大辞典』などの辞書は「まとも」を見出し語としてその意味を説明しているが、その記述には検討すべき点があり、必ずしも「まともに」にも当てはまるとは限らないといった問題があるため、本研究ではコーパスから用例を収集し、実例に基づいて「まともに」の意味と用法を分析した。</p> <p>現代日本語書き言葉均衡コーパスから用例を868例収集することができた。これに基づいて「まともに」の意味、及び否定との関係性について検討した。その結果、「まともに」の意味は、①人や物が物理的に正面から相対する、②間に隔たりがなく、直接に、③ほかの言動を取らずに、そのまま、④事態が想定したように行われる、の四つに分類することができること、意味①は「向き合う」や「見る」などの動詞の場合、意味②は「当たる」など接触を表す動詞の場合、意味③は「たしなめる」などの意志性を持つ動詞の場合、意味④は「考える」や「答える」などの動詞の場合、にそれぞれ明確に観察され、各意味は「まともに」の修飾先の述語の特徴と緊密に関わっていること、また、修飾先の述語が肯定形、否定形のいずれを取るかに関わらず、「まともに」が使用される文は全体的に否定との親和性が高いこと、の三点が明らかになった。</p> <p>「まともに」は意味④の場合、「ろくに」や「満足に」と、現実の事態が話し手の想定した基準との関係を表すという点で共通している。これらは話し手の想定した基準に関わる副詞的な表現と位置付けることができると考えられる。ただし、これらの表現は意味や使用が完全に一致しているわけではない。例えば、「まともに」と「ろくに」は意味的には、「まともに」が事態の内容が話し手の想定した基準に接近していても、話し手の想定した基準のだいぶ下でもよいのに対して、「ろくに」は事態の内容が話し手の想定した基準のだいぶ下であり、ゼロに近いという違いがある。また「まともに」は否定文だけでなく、疑問文や仮定節にも現れるが、「ろくに」は否定文にしか現れない、というように否定との呼応の仕方においても両者には違いがある。</p> <p>発表後、指摘を受けた通り、「まともに」には文脈で観察される意味より、さらに基本的な意味（基本義）が存在し、その基本義が場面や述語の特徴によって変わるのではないかと、また、本研究で提示した四つの意味は具体的にどういう関係にあるのか、等々について考察する課題が残されている。これらについては今後さらに検討したい。</p> <p>参考文献（主要）</p> <p>工藤真由美（1999）「否定と呼応する副詞をめぐって：実態調査から」『大阪大学文学部紀要』39／尚暁歆（2021a）「否定形式「ない」と呼応する副詞「ろくに」に関する考察」第十二届漢日対比語言学研討会発表資料／尚暁歆（2021b）「「ろくに」の構文特徴に関する考察」第19回対照行動言語学研究会発表資料／矢澤真人（2000）「副詞的修飾の諸相」仁田義雄・益岡隆志『日本語の文法 文の骨格』岩波書店</p> <p>辞書類：小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典 第二版』小学館／新村出編（2018）『広辞苑 第七版』岩波書店／松村明編（2019）『大辞林 第四版』三省堂／北原保雄編（2020）『明鏡国語辞典 第三版』大修館書店</p>	